東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
学生新聞会
男子部
新宿区柏木4－600
TEL (392) 3261
女子部
台東区上野桜木1-10-19
TEL (821) 4004

沖縄人民の闘いに応え、日本軍自衛隊の沖縄派兵を阻止せよ！

帝国主義本土政府によるコソ泥のような、沖縄への民間物資を装っての自衛隊装備のモノ盗り搬入は港湾労働者を先頭とする沖縄人民の闘いの前に粉砕され、政府は搬入した物資を本土に送り返すというまったくみじめな状態に追いこまれてしまった。

昨年1・10沖縄全島ゼネストを頂点とする沖縄返還協定粉砕闘争を経て、沖縄人民の闘いは米軍基地及び日本帝国主義本土政府に直接実力で対決する闘いとして、ますます深くそして広くなりつつある。

現在沖縄では、大量不当解雇撤回を要求する争議の無期限ストライキが続いており、あらゆる人々が、一ドル三六〇円交換レートを要求し闘っている。沖縄では生活必需品の大半を占める本土輸入品が急激に高騰している。米軍基地によって徹底して畸形化された沖縄経済が今またドル防衛の為に全面的に犠牲されている。円切り上げによって沖縄人民は五月一五日以降自動的に一五％の賃上げを強制されようとしているのである。これ等様々の重大な犠牲をしいられようとしている沖縄人民に対して、米日帝国主義は、更なる攻撃をかけてきている。それが即ち沖縄「返還」に基づく自衛隊の沖縄派兵である。

いうまでもなく、「沖縄返還」の最大の目的は、戦後二六年間の困難な闘いの積み上げによって米軍基地機能を麻痺させようとしている沖縄人民の反軍事植民地抵抗闘争を、日本帝国主義国家権力の施政権返還によって収約・圧殺しアジア反革命軍事基地群を防衛し、維持しようとするものであり、日本帝国主義が自らの生命線たるアジアの帝国主義的秩序を維持し、まさしく「アジア安定の主役」として登場していこうとするものである。そして沖縄の軍事基地群は縮少されるどころか更に強化され、米軍に土地を奪われていた人民の土地も、返還されるどころか今度は日本軍＝自衛隊によって強奪されようとしているのである。

沖縄人民の太平洋戦争末期における「沖縄決戦」と日本軍の暴虐に対する憤怒は、深く沖縄人民の脳裡に焼ついており、それは巨大なエネルギーとなって自衛隊＝日本軍の上陸に対決している。

自衛隊の沖縄派兵は、その出発点から沖縄人民の猛攻を受け、防衛庁が立てた計画が一つ一つ粉砕されながら、前途多難の中で推進されようとしている。この一月、沖縄におおいた野呂防衛庁政務次官は、県労協のピケットによって屋良主席との会談を阻止され、反戦地主を説得することも出来ず本土に引きかえし、先日は、自衛隊物資のモノ盗り搬入が粉砕されている。日本帝国主義がその矛先を傾けて強行しようとしている沖縄派兵は、これまでの交渉・妥協・懐柔やその批准の強行にもまして困難である。それまでの過程は、沖縄人民の存在している沖縄島ではなく、東京やワシントンで行う事が出来た。だがしかし、その具体的実施は、直接沖縄島で行わなければならない。沖縄人民の怒りと体を張った実力阻止闘争を突破して上陸せねばならない自衛隊の沖縄派兵は、上陸の第一歩から「治安出動」にならざるを得ない情況である。

沖縄人民は全島土地強奪粉砕闘争とともに「日本軍自衛隊を絶対に上陸させない」「来るなら粉砕する」闘争に突入している。われわれは、この沖縄人民の闘争に連帯し、呼応して「自衛隊を絶対に沖縄に行かせない」闘争を闘い抜かねばならない。社・共と総評の指導部は「沖縄は日本の領土（だから自衛隊派兵は当然）」という根本方針であり、これと闘い抜こうとはしない。われわれは社共の裏切りを乗り越え、沖縄人民の勝利のために闘い抜かねばならない。

○自衛隊沖縄派兵実力阻止！
○土地強制収奪粉砕！
○通貨を一ドル三六〇円で切り替えよ！
○教育委員会の任命制適用反対！
○地公法・国公法の適用による公労協組合活動に対する弾圧反対！
○米軍基地撤去！
○沖縄人民の無条件の自治・自決権を！

三里塚闘争の現段階

三里塚空港建設阻止闘争は、既に六年間にわたって闘い抜かれている。戦闘的な農民と、それを支援する労働者、学生のねばり強いかつ非妥協的な闘いは、遂に政府・公団を決定的に追いつめた。

これまで空港建設は着々と進んでいるかのように、新聞等マスコミを通じてデマを流し続けて来たが、政府・公団も、最近ようやく状況の事を認めつつある。闘いは建設予定地から騒音区域へ、そして北総千葉茨城全域の関連事業地域へと拡大しつつあり、この地域の住民闘争と強固な連帯を形造りつつあるのだ。

反対同盟を中心にしたこの6年間の激しい闘いは、政府・公団の機動隊による暴力的な弾圧も、陰険な切りくずしも粉砕して政府・公団に巨大な打撃を与え、空港建設事業計画の後退変更と、工事の大幅な遅延を強制して来た。第一期工区内の反対同盟の拠点駒井野・天浪等も政府公団の物量作戦の前に失ったが、戦いは最後的な空港の粉砕に向けて大きく前進して来ている。その成果は次のようである。一月一一日、運輸省と空港公団は七二年六月開港を世界各国航空会社、国内各航空会社に連絡したが、各国航空会社の共同機関である国際航空運送協会は、さまざまな問題点を指摘し、三里塚空港への国際空港の移転を承認していない。

まず第一に、滑走路がせまい事。四〇〇〇米滑走路には、保安施設が南端から内側へ七五〇m食いむことになった。三二〇m・三五〇〇m滑走路（第2期工事区）の完成の見通しがなく実質三一五〇m一本の「国際空港」があるだろうか。二、航空路監視レーダ（銚子に建設予定・現在土地搬入の段階）が開港にまたあわないためジャンボ機の上昇、下降に不安がある。三、三宅島に建設予定の無線標識施設・距離測定用施設が完成しそうもなく、羽田・横田と関連して、現在の大島ポイントの混雑が激化する。四、近くに自衛隊百里基地があり、全日空惨事の二の舞をくりかえしかねない、などの点であり、そのうえ、三里塚は内陸であり、騒音区域もせまい（前後2Kmづつ、左右600mづつカナダの空港では前後2.7Kmづつ左右9Kmづつ）ために、夜間の飛行制限を行う事を空港公団は発表しているが、各国航空会社は、それは全体にのめない条件であるとしている。

もし公団が、外国の航空会社に移転を認めてもらうために夜間飛行制限・騒音制限をゆるめたらいったいどうなるだろうか。（これだけでは認めてくれるはずもないが）現在すでに自民党議員を中心にする条件賛成グループを圧倒して展開されている芝山町・成田市の騒音反対の住民運動を強く刺激し、その尖鋭化を引き起こさずにはおかないであろう。そして、国際空港として機能をはたす為に絶対に必要な三二〇〇m・二五〇〇m滑走路・航空機修理工場等の建設予定地である第2期工事区は、反対同盟の三戸の家屋、宅地、五五戸の耕作地を有する反対同盟の最大拠点であり、第一期工事区の大半が御料牧場であったにもかかわらず、その収用があれ程困難であった事を考える時、第2期工事は公団にとって絶望的な困難性を持っているだろう。

闘いは三里塚芝山、成田だけでなく、千葉県全域から茨城にまで広がっている。

三里塚空港の生命線である航空燃料輸送パイプライン埋設工事はパイプライン埋設沿線住民の強力な反対運動に直面している。反対運動は市議会を拠闘争にまで発展しており、市議会は最近ようやく強行採決にこぎつけたが、建設が見込み立たずであることはあきらかである。その他関連道路建設、用水路建設、成田新幹線建設等全ての計画が暗礁に乗り上げたままである。そして、遂に三里塚の闘いは、高浜入干拓反対闘争をはじめとする霞ヶ浦沿辺漁民、利根川周辺漁民の闘いとも結合を開始しつつあり、鹿島工業地帯における反公害闘争との結合をかちとりつつある。三月二三日の地域住民十三団体の共催による、三里塚芝山粉砕、六月開港阻止住民集会にはいきりたっている。今や政府・公団は、決定的に追いつめられたのだ。

このような中で、一貫して反対同盟に敵対して来た百姓のみっともなさがうきぼりとなる。

権力との一切の真剣な闘いを組織せず、それればかりか戦闘的労働者、学生と反対同盟との団結を妨害し、破壊しようとする日本共産党は、反対同盟によって三里塚闘争から排除されるや、今度は条件賛成派への介入をはじめた。彼等は、空港建設予算獲得として、土地の値段のつり上げをはかるまでに堕落した。

三里塚芝浦は、国際資本の覇権争の激化の中で、アジアの盟主として登場しようとする日本独占資本の、全国コンビナート網の建設、交通、運輸機構再編成の中で重要な位置をしめる航空運輸の拠点として建設されようとしており、日共のこのような条件賛成派への転落は、彼等が、世界的な公害の激化の中で、「何の為の生産か」「何の為の進歩か」と素朴な疑問を持ちはじめた多くの民衆の、全国工場列島化反対、全国公害列島化反対の意識にすらほかにおくれ、独占資本の生産第一、そしてその為の能率の向上第一、の思想の中に、すっぽりととり込まれてしまっていることを明確に示している。

我々はこのような反動的な集団に、六年間にわたって闘い抜かれてきあった。そのうちの同団体は早朝に到着し、米軍横田基地視察の強行軍の決意でバスを連らねてきていた。他の団体では、北陸から内灘闘争の輝やかしい伝統を受けついで闘う人達から内灘の自然と人間を守る会たち、更に、三重の白山、岡山の日本原、九州の芦屋保安と津ヶ浦ヶからかけつけてきた。さらに力強く沖縄の仲吉島から、阿波根氏から熱い激励の電報が紹介された。阿波根氏は、武装米兵のブルドーザー、戦車と対決して、身をもって土地取りとげと闘ってきた人で、武力で土地を取りとげられ苦しめられてきた沖縄の農民は阿波根氏を先頭に土地取り上げ法＝「公用地使用法」に対して闘っている。

「タイカイヘイコウヲ　イノルワレワレモトチカイヤク　ハンタイノ　タタカイフラスメディマス　トモニガンバロウ」

このように、全国各地において地域闘争を最も先頭に闘っている住民の大団結が勝ちとられたことは大きな意義があるだろう。これに先立ち、すでに三月七日に砂川反対同盟や立川市民を中心として「自衛隊立川基地移駐阻止労学市民大集会」を千余名をもって成功させ、八日、九日と立川駅頭での抗議のビラまきが大々的に行なわれた。また立川周辺の市、特に国立市においても、毎日連日に自衛隊立川基地移駐阻止のデモが、国立市民の会を中心に行なわれ、さらに、西國寺公一氏を招いて集会などが行なわれた。日増しに地域住民の中に自衛隊に対する怒りが強くなっている。この間、東薬大P戦線は、一貫としてこれらの闘争に参加し、自衛隊を立川から追いだすまで地域住民と共に闘っていきたいと考えます。

砂川（立川基地）・三里塚軍事空港・沖縄問題のこの三つの環こそ日本帝国主義者が、アジア侵略の要めであり、米中接近・ドル危機、円切り上げなどもろもろが示したごとく、日帝の危機は、ますます深化し、日帝の国内再編成の重要な点なのである。しかし、今日の日帝の危機は、日帝をとりまくアジア諸国の情勢の危機的深化という客体的側面によっても、大きく突き出されているのである。すなわち、そもそも今日の日帝の危機は、戦後一貫して絶対的支配者であった米帝自身がベトナム侵略戦争の破綻を最大の動因として完全に行き詰まり、米中会談にみられるような動揺と再編の策謀によって一定程度後退するかの如き調整的動揺を余儀なくされているにもかかわらず、そうした帝国主義の総体的支配の後退、植民地民族解放闘争の激化と昂揚という歴史的転換局面にあってもなお、日本帝国主義としては日米同盟の再編・強化を軸にしながら部分的には、米帝の後退への積極的肩代りをテコにしてアジア侵略の強化という道しか持っていないというその歴史的非選択的硬直性をもって当るしかないということにあるのである。

また、今年都営から立川へ移駐しようとしている自衛隊ヘリコプター部隊が東京都の災害救助のためのものだと言っているが、何故市民から隠れるようにコレコソと惨めに深夜来なければならないのか、また何故そのように急ぐのか、また自衛隊は、市ケ谷にも宇都宮にも習志野にもあり、今日機械部隊というのは立川からでも基地からの必要時間は今までとほとんど差がないということです。それなのに、防衛庁が立川市民の八十二％といった大多数の反対を押し切ってでも移駐しようというのは、都民の為にと思って必死に早く移駐するのでは決してない。それは、アジア侵略の為の国内侵略体制構築への第一歩であり、次に続く沖縄派兵の布石であり、それは人民の災害を救助する部隊ではなく、正しくブルジョワジーを救助するものなのである。ある自衛官言わく、「立川のときに移駐できなかも沖縄に行けるか」という

と飲喝によって奇襲的立川移駐を強行したのである。考えてみよ！「富士計画」「Dデー」などと言って立川に移駐した自衛隊の仮想敵は立川市民なのである。それと同じく、沖縄派兵においては仮想敵は自衛隊の敵は人民大衆であり、国を守るということは人民大衆からブルジョワジーを守るということなのである。

阿部『革新』市長の裏切りを弾劾する

阿部革新市長がなす術もなく防衛庁、市議会内保守派に手足にとられ、屈服し、「基地反対」の一点で彼を支持した圧倒的多数の市民を裏切っていくなかで、「反対同盟と共に闘おう」と決して言わないどころか「宮本はトロッキストとやっている」などの誹謗・中傷を投げかけ、反対同盟に敵対し選挙目当てのアリバイ闘争としての「移駐反対」を唱える社共を弾劾しながら戦闘的、大衆的な闘いを組織していかなければならない。また、日本共産党のあらゆるデマや中傷を粉砕し、我々に対するあらゆる闘争破壊を許すな！全ての新人生諸君、共に闘おう。

東薬大P戦線

連絡、意見などは東薬大新聞会内P戦線へ

派遣団募集中！

☆第3回沖縄薬草無医地区調査

社会医療研究所では、昨年夏及び今年春の、2度の調査の成果をふまえ、今年夏第3回の調査活動を予定しています。

多くの学友諸君が我々とともにこの調査活動に参加してほしいと考えます。

内容について詳細は、日本社会医療研究所（TEL・300－4408、または東薬大新聞会まで連絡して下さい。

薬味

今日も、われわれの身体の中を、金属をめぐる血管に乗って、弱い電流が流れるように雑多な危機感が走っていく。危機感とは、情報によって観念的に形成されるものと、可視の情況において具体化の経過を伴うものがあると思う。観念的な危機感は、人間の精神面にとっての確かな起点となる。思考方法の輪を拡大するからだ。そして危機を情報や観念からではなく、具体例から知覚するようになると、そこに行動を発して目標を持つようになる。危機感はいつでも誰にでも存在する。昔に後楽園を見張って、宇宙の危機におびえて熱を出した覚えもあるだろう。今だって、無論現実の悪夢が不安をつのらせ、息苦しい悪夢をみることがあるだろう。しかし、いくら危機感が思考開始の位置を与えるとしても、幻想と妄想からではあまりにも疲労すると思う。また、情況の把握を避けてしまったら、それは知覚の人間として自殺行為である。われわれはいつも身構えている必要はないと思う。しかし、情況に対して鋭敏に反応できる姿勢をくずしてはならないと思う。それは適応反応か、拒絶反応か一多分そんな単純ではないのだが▼現代は、危機の氾濫期でもあるといわれる。われわれが多感になったのか、危機過多なのか否、われわれが現実を主体的に、直接的に透視しようと始めたからだ。ひとつの大衆的な現れとして公害闘争がある。公害問題は昭和四十五年に入って、急激に爆発した感がある。黒部のカドミ汚染、富山のエチル水銀問題、水俣病補償処理、光化学スモッグ、ヘドロ問題。どの問題も最近始まったことではなくカドミウムは三十七年水俣は三十一年、早くから警告はなされていた。一つには、新聞の増ページ競争で紙面が空いてしまい、誰も異論のないニュースとして、安保に代わって公害が出てきたこともあげられる。が、しかし現実としてもう包み隠すことのできない、生命の危機が露呈してきたのだ。戦後政府が一枚加わって巨大資本企業とともに地域住民を無視した拠点開発を推し進めたために、太平洋ベルト地帯に重化学工業の拠点をつくり、風土を腐蝕させていった。工場地帯を狭い地域に集中させて、経費を安くあげる。そして戦後の大量消費時代の宛伝効果は、大企業の独占を発展させていった。今未解決の公害型産業を、そのまま沖縄の東海岸に移駐することによって、独占資本は問題をもみ消そうとしているそれも生態学的に非常に弱い土地沖縄に▼昨年秋、東薬において発足した「七〇年代と薬学を考える会（70P）」よりの提案の冒頭に『人類は今や未曾有の危機に直面している』とあった。その後、執行委員長選挙を迎えて、および正しいパンフが全学友の手に渡されたそこで顕著に、前熱行部の「生活を守る闘い」に対して70Pは「生命を守る闘い」を対置し、以後、学内外において水俣病患者さん支援闘争、医療問題、学習会を続けている。新たに現実化する多くの危機を的確に把握し、乗り越えられるだけの蓄積を70Pと共に始めていこうではないか。

新執行委員長に堀端君選出される

去る一月の自治会執行委員長選挙において、四七年度執行委員長が選出された。一Dの堀端茂樹君である。

選挙戦は去るお公民真行君との間で極めて激しく闘われ、投票率はその結果七五％を越える高率を示したのである。

我々新聞会は、社会医療研究会とともに、「社会に対して発言し行動する自治会の建設を！」全国公害闘争勝利・東薬祭と日常活動の関係の是正に基づくサークル活動の活発化・生ホールの半分を部室にこその他のスローガンの下七〇年代と薬学を考える会から立候補した矢武君を支援したが、力及ばず惜敗した。

生協設立準備委員会、執行部等の推薦を受けて立候補した堀端君は、生協設立を軸にした活発なかつて闘った激しい選挙戦の結果学友の関心は高まっており、新執行委員長の政策実現にとって極めて有利な情況が生まれている。

堀端君がかかげた政策は次の様なものであるが、彼はその実現のため為に三百九二票の重みにかけて頑張るにちがいない。彼は当選するためにのみやたらと公約をならべたてる代議士達とは違い、非常に真面目な人物である事は多くの学友が知る通りである。

○生協6月実現・10月営業開始（主要内容○新食堂、文具書籍等）
○クラブサークル活動援助強化（当局から百万円獲得・ロッカー前に部室30室新築）
○実習・クラブサークル活動もの優先全額保証の実現目ざす。
○学費値上反対・カリキュラム改革・自主ゼミ援助金　その他である。期待して注視したい。

自衛隊立川移駐を阻止せよ！

政府・防衛庁は三月七日深夜から八日にかけて、自衛隊の立川基地への第二次移駐を強行した。地元市民の八十二％の圧倒的反対を無視して、いまや大衆的な怒りが爆発しつつあり、立川市民と各地において多数の非難のデモや集会が行なわれている。その中でも、三月十九日には、「自衛隊立川移駐・沖縄派兵阻止・軍事基地撤去・四次防粉砕・三・一九全国住民闘争総決起集会」が行なわれ、八十六団体・六千余名が結集し砂川反戦広場、あの鉄格のもとにおいて行なわれた。北は北海道から、南は九州まで、闘う農民住民が、砂川に続く到着し、その中でも基地闘争を行なっている主力団体が多数参加した。

それは自衛隊の水爆ミサイル基地を作ろうとする政府の野望に対決して闘っている長沼ミサイル基地設置反対同盟であり、千葉県の、国際軍事空港建設に反対して苛酷な弾圧にもめげず闘う、三里塚・芝山連合空港反対同盟を中心とする北総台地一帯の農民であり、茨城県の生活破壊である高浜入干拓に反対し自衛隊百里基地を包囲して闘う高浜入干拓反対同盟の漁民・農民、そして山梨県からは、米軍実弾演習に体をはって対決している北富士の忍草母の会と入合組合の農民、関西からの国際軍事空港に反対する淡路町空港反対同盟と水爆ミサイル基地に反対する能勢町ミサイル基地設置反対期成同盟を中心とする闘う農民・住民達であった。そのうちの同団体は早朝に到着し、米軍横田基地視察の強行軍の決意でバスを連らねてきていた。他の団体では、北陸から内灘闘争の輝やかしい伝統を受けついで闘う人達から内灘の自然と人間を守る会たち、更に、三重の白山、岡山の日本原、九州の芦屋保安と津ヶ浦ヶからかけつけてきた。さらに力強く沖縄の仲吉島から、阿波根氏から熱い激励の電報が紹介された。阿波根氏は、武装米兵のブルドーザー、戦車と対決して、身をもって土地取りとげと闘ってきた人で、武力で土地を取りとげられ苦しめられてきた沖縄の農民は阿波根氏を先頭に土地取り上げ法＝「公用地使用法」に対して闘っている。

「タイカイヘイコウヲ　イノルワレワレモトチカイヤク　ハンタイノ　タタカイフラスメディマス　トモニガンバロウ」

このように、全国各地において地域闘争を最も先頭に闘っている住民の大団結が勝ちとられたことは大きな意義があるだろう。これに先立ち、すでに三月七日に砂川反対同盟や立川市民を中心として「自衛隊立川基地移駐阻止労学市民大集会」を千余名をもって成功させ、八日、九日と立川駅頭での抗議のビラまきが大々的に行なわれた。また立川周辺の市、特に国立市においても、毎日連日に自衛隊立川基地移駐阻止のデモが、国立市民の会を中心に行なわれ、さらに、西國寺公一氏を招いて集会などが行なわれた。日増しに地域住民の中に自衛隊に対する怒りが強くなっている。この間、東薬大P戦線は、一貫としてこれらの闘争に参加し、自衛隊を立川から追いだすまで地域住民と共に闘っていきたいと考えます。

砂川（立川基地）・三里塚軍事空港・沖縄問題のこの三つの環こそ日本帝国主義者が、アジア侵略の要めであり、米中接近・ドル危機、円切り上げなどもろもろが示したごとく、日帝の危機は、ますます深化し、日帝の国内再編成の重要な点なのである。しかし、今日の日帝の危機は、日帝をとりまくアジア諸国の情勢の危機的深化という客体的側面によっても、大きく突き出されているのである。すなわち、そもそも今日の日帝の危機は、戦後一貫して絶対的支配者であった米帝自身がベトナム侵略戦争の破綻を最大の動因として完全に行き詰まり、米中会談にみられるような動揺と再編の策謀によって一定程度後退するかの如き調整的動揺を余儀なくされているにもかかわらず、そうした帝国主義の総体的支配の後退、植民地民族解放闘争の激化と昂揚という歴史的転換局面にあってもなお、日本帝国主義としては日米同盟の再編・強化を軸にしながら部分的には、米帝の後退への積極的肩代りをテコにしてアジア侵略の強化という道しか持っていないというその歴史的非選択的硬直性をもって当るしかないということにあるのである。

また、今年都営から立川へ移駐しようとしている自衛隊ヘリコプター部隊が東京都の災害救助のためのものだと言っているが、何故市民から隠れるようにコレコソと惨めに深夜来なければならないのか、また何故そのように急ぐのか、また自衛隊は、市ケ谷にも宇都宮にも習志野にもあり、今日機械部隊というのは立川からでも基地からの必要時間は今までとほとんど差がないということです。それなのに、防衛庁が立川市民の八十二％といった大多数の反対を押し切ってでも移駐しようというのは、都民の為にと思って必死に早く移駐するのでは決してない。それは、アジア侵略の為の国内侵略体制構築への第一歩であり、次に続く沖縄派兵の布石であり、それは人民の災害を救助する部隊ではなく、正しくブルジョワジーを救助するものなのである。ある自衛官言わく、「立川のときに移駐できなかも沖縄に行けるか」という

と飲喝によって奇襲的立川移駐を強行したのである。考えてみよ！「富士計画」「Dデー」などと言って立川に移駐した自衛隊の仮想敵は立川市民なのである。それと同じく、沖縄派兵においては仮想敵は自衛隊の敵は人民大衆であり、国を守るということは人民大衆からブルジョワジーを守るということなのである。

南山堂　113-91　東京都文京区湯島4丁目1-11　電話 (03)811-7241　振替 東京6338

定評ある南山堂の薬学書

＊薬学図書目録贈呈＊　■取扱店　新宿・紀伊国屋書店

福岡大学教授　塚元久雄　編
新裁判化学　A5 327頁　価2,200円

国立衛生試験所薬品部長　井上哲男　編
医薬品添加物 —使用法と留意点—　A5 230頁　価2,300円

南山堂
医学大辞典　豪華 価8,000円　縮刷 価4,500円

前東医大教授　加藤勝治　編
医学英和大辞典　豪華 価8,000円　縮刷 価4,500円

東京大学講師　藤田拓男　編
日英独医語小辞典　ポケット 370頁　価950円

九州大学教授　田口胤三　著
立体化学入門　A5 398頁　価2,300円

田口胤三・山田俊一・大木貞雄　著
有機薬品製造化学　A5 541頁　価2,500円

鶴藤　丞・村上悠紀雄・吉沢康雄　著
放射薬品学　A5 366頁　価2,000円

東大名誉教授　石館守三　著
微量定性分析　A5. 474頁　価2,500円

塚元久雄・浮田忠之進　編
新衛生化学　A5 405頁　価2,500円

日本薬学会　編
繁用衛生試験法と解説　A5 449頁　価2,600円

東邦大学教授　安田利顕　著
ヒフと化粧品　A5 108頁　価 750円

前資生堂研究所長　池田鉄作　編
化粧品学　A5 332頁　価1,500円

久保文苗・赤塚謙一　著
新薬の知識　A5 431頁　価2,800円

東北大学教授　小沢　光　著
常用新薬の薬理　A5 614頁　価5,500円

高木敬次郎・小沢　光　著
薬物学　A5 627頁　価3,300円

高木敬次郎・小沢　光　編
薬物学実験　A5 230頁　価1,300円

薬学博士　中島栄一　著
新薬剤学入門　A5 214頁　価1,300円

九州大学医学部付属病院薬剤部長　堀岡正義　著
病院薬局学　A5 296頁　価2,200円

東邦大学名誉教授　清水藤太郎　著
薬学ラテン語　A5 153頁　価1,300円

清水藤太郎・清水正夫　編
第八改正 日本薬局方ハンドブック　A5 530頁　価5,000円

秋葉朝一郎・桑原章吾　著
薬学領域の病原微生物学　A5 371頁　価2,000円

田中　穣・倉田　浩　著
薬学領域の発酵化学　A5 209頁　価1,200円

第一回沖縄薬草無医地区調査報告

医療解放を我々の手で！沖縄の薬を求めて（その一）

日本社会医療研究所
海外医療衛生協力隊

まえがき

東京より西南千六百キロの彼方に浮かぶ沖縄へ、昨年八月、私達は三班に別れて出発した。去年八月の第一回沖縄薬草無医地区調査は、復帰を前にした沖縄社会がどのような医療状態にあり、どのような医療を復帰後に求めているかという実態調査であった。協力隊が沖縄列島へ四名、与論島へ一名渡り、約二十日間の調査活動を終えて九月二日帰還した。

調査の主要な力点は、沖縄に住民による自主管理された薬草園建設が可能であるかということ、次に東洋医学療と西洋医学療法の社会的実用度の違いが無医村問題にどう作用しているかという二点であった。私達協力隊の基本的立場である四つの原則を軸に、右二つの点を、沖縄県民との対話を通してまとめてみたいと思う。一応、報告書として期日に添って私達の活動した内容、範囲、私達の運動への見解、又、沖縄の人達の見解をまとめてみることにしたい。

八月十・十一日

協力隊調査団は三班に別れて出発した。A班は東京国際空港より日航で那覇空港へ飛び、B班は大阪まで新幹線で行き、大阪国際空港より那覇空港へ飛んだ。C班は東京駅より特急寝台車で西鹿児島駅まで行き、鹿児島空港より全日空にて那覇まで飛ぶことになった。このように三班に分かれて飛んだ理由は、次期第二回沖縄薬草無医地区調査を来春（即ち今年の三月）に予定していたため、最も有益な渡航コースを決める必要があったからである。結果として、C班コースが安くてしかも巡航高度が六〇〇〇㍍であるため沖縄全島を見渡すことが出来、又、鹿児島から沖縄列島までの島々をかなり近い距離で見下すことができた。沖縄列島（本島）を上空より見ることによって、本島の土地利用のありさまを十分見ることができた。これは、薬草園利用地としての設定地が比較的掴めやすいという利点があった。（A、Bコースでは高度が高すぎ、且つコースが沖縄本島上空を飛ばず海上コースを取る為、十分上空写真がとれない不利な点であった。沖縄へは鹿児島から約一時間十五分の飛行の後、那覇空港に着き、集合場所である世界情報新聞社へ集まることになっていた。

八月十二日

全員新聞社事務所に集まり、パスポート保証人になってもらった編集発行人、つまり社長と調査活動コースの日程などを決めることにした。

まず調査の対象として医療関係官公庁（医療行政機関、病院、保健所、診療所）に行き、その担当責任者に復帰以降、沖縄の医療をどうしたらよいか将ねたり、主婦団体に対して座談会を申し込むことにした。

八月十三日

渡航後、はじめての休暇、名城ロングビーチで海水浴。

八月十四日

社医研医衛協力隊会議
会見申込手続きをし、スケジュールを確定、座談会日程を確定。

八月十五日

那覇市内を見物、地理を頭に入れる。これは活動を能率的に進めるため、主要道路を覚えておくためであった。

八月十六日

全日本国立医療労働組合沖縄県支部、沖縄官公庁労働組合医療支部委員長M氏と会見（那覇病院にて）

◎M氏の主張

医療機関の施設が不十分であり且つ医者、看護婦不足（別表参照）医療設備予算が本土よりも相対的に低く、看護婦等の労働条件が非常に悪い。例えば、急患時の病院からの呼び出しには、何はさておき駆けつけねばならず、夜間当番がなく、自腹を切らざるを得ないという現状である。特に看護婦の一病院に対する雇用絶対数が少いため、交代制が敷かれ（本土でも同じ）、月のうち十日は宿直という厳しい労働条件に迫られている。従って、医療組合運動も専ら賃上げ闘争、労働条件の改善という内容をもつものであり、漢方と東洋医学療法等に対する関心は現実的に持ちえない。

◎私達（社医研）の感想

ここには、医療事務従事者として患者に対する治療態度というよりも、自己の生活を守ろうとする実態が伺われた。私達は、このことに対してもっともなことだと思った。だが私達の側の主張として言いたいことは、現実の現象的表面的問題に対する解決は、より本質的な次元で解決が打ち出されない限り、沖縄の無医島化の問題は解決するものではないということである。従って、医療組合運動も専ら賃上げ闘争、労働条件の改善という内容をもつものであり、漢方と東洋医学療法等に対する関心は現実的に持ちえない。

◎私達（社医研）の感想

ここには、医療事務従事者として患者に対する治療態度というよりも、自己の生活を守ろうとする実態が伺われた。私達は、このことに対してもっともなことだと思った。だが私達の側の主張として言いたいことは、現実の現象的表面的問題に対する解決は、より本質的な次元で解決が打ち出されない限り、沖縄の無医島化の問題は解決するものではないということである。従って、急患の中に盲腸炎の患者が居る時など、手術する知識も技術も持っていながら、法律上医師の免許を持っている者が手術ができない為に患者を本島まで船で運ぶという全く不合理な事をせざるを得なかったという。このように本島まで運ぶ船の中で症状が悪化し、死んでしまうという事がいくたびかあったという。こうした事が起きる度に、S氏は同僚の医介輔の人達と米軍政府または琉球政府に、医師としての法的許可を与えてくるように嘆願したが戦後二十余年、一度として彼らの意見は社会的に認められず、見棄てられてきた。医介輔は二十数年間無医村地帯に飛ばされ、正規の医者はぬくぬくと本島の町の中で開業し、楽な暮しに浸っている。

「今、彼らは医介輔組合を結成し約五十人の医介輔の人達と医師認可を求めて闘争している。現在、正規の医師と医介輔との費金十の差を比べると医師公務員の場合約千ドル、医介輔は三百ドルが現実であった。S氏の働く職場は、沖縄刑務所の中である。正規の医者は刑務所診療所での診療を拒否し、いつも医介輔のみが、刑務所の診療活動がまわってくる現状である。今、彼らの要求は、一つに集約できるであろう。つまり「医者の免許を与えてくれ」ということである。医師の免許があれば、無医村においても、自分の持つ全力量を発揮して患者を見ることができるという。しかし、現在、本土の無医村問題を考えてみると、果たして医介輔の人達が積極的に、無医村地区の診療に従事できるであろうかということである。これは現在、医師という社会的地位が、常利的志向を孕むための必然的要因として、開業医の経済的基盤が、投薬の点数表示による診療計算を基礎としているため、患者経営がなりたち、診療所または病院を開業する際に、患者により多くの薬を与え、より点数の高い手術等の治療を施す事が必要となってくる診断、治療論の方法論は二元化され、歴史的に体系づけられ、実際の治療面でも大きな効果をとげている。ここには、生命体（人体）と有機合成薬品との生体反応の不明確性、つまり薬理学そのものの科学としての信頼性があるかどうか問う必要があろう。私達は現在の薬理学は便宜的な非科学的学問でしかないと思っている。治療とは、生体をより元の自然な状態へ返すことをいうものであり、現代の西洋医学療法を考えると、もとの生体の自然な状態へ、生体を移行させ、その過程を治療の段階ととらえ、病的現象の表面的作用の消滅を治ったとする由、そこから次の新たな病的症状の移行を通して新しい病名判断が行われ、全治という治療の目標を達成しえないのが現実のようだ。

したがって、現代世界の医療問題を語るとき、単に施設制度、機関を問題とする以前に、医療を支える診断治療のあり方を歴史的に見直す必要があり、そうした時代に来ているのではないだろうか。

商層ビルの病院ができたり、医者や薬剤師や看護婦の頭数が多いよりよい思う生産力思想で現実の医療問題は解決するものではないということを肝に命じておこうではないか。

私達のM氏に対する主張は、伝染病等による疾患の予防に対して環境の整備、虚弱体質（消化器系疾患）、慢性病（職業病患）に対する対策とし、適度の運動（労働を含む）と十分な食事を通して健康は勝ち取れるものであり、薬や病院施設を増大しても、思った程の社会的効果はないであろうということであった。それは東京を見れば、よくわかるであろう。M氏との対談では、いろいろ意見の食い違いはあったがお互いの意見は理解しえたように思う。

八月十七日

医介輔、沖縄刑務所医務課勤務S氏と会見（沖縄刑務所内、医務室にて）、医介輔とは、戦時中陸軍歩兵隊の衛生班で医療衛生活動をしていた人が、戦後沖縄における医者不足に対して医者としての法的免許は与えられなかったが、診断治療の従事できる人を指す。現在の日本では沖縄にしか見られない特異的な存在である。ことに私達は沖縄医療の一つの問題を掘り下げて行くことができると思った。

私達はS氏に医介輔としての自分の社会的位置について尋ねてみたところ、過去の道程を思いついたまま私達に語ってくれた。

彼は終戦後間もなく米駐留軍の臨床医学実習所に送られ、約六ケ月の短期教育を受け、盲腸の手術とか解剖学の実習教育を受け、医介輔試験にパスして世に出た。そ れ以降、彼の職場には一貫して無医村地区の診療活動が与えられ、八重山群島の一つ、石垣島での診療活動が始まることになった。ところが、診療活動の過程で大きな問題にぶつかる事になった。それは、法的には医師として認められないという事である。であるから抗生物質などは使いたくても使うことができず、限られた薬品しか治療に使うことを許されなかった。従って、急患の中に盲腸炎の人が居る時など、手術する知識も技術も持っていながら、法律上医師の免許を持っている者が手術ができない為に患者を本島まで船で運ぶという全く不合理な事をせざるを得なかったという。このように本島まで運ぶ船の中で症状が悪化し、死んでしまうという事がいくたびかあったという。こうした事が起きる度に、S氏は同僚の医介輔の人達と米軍政府または琉球政府に、医師としての法的許可を与えてくるように嘆願したが戦後二十余年、一度として彼らの意見は社会的に認められず、見棄てられてきた。医介輔は二十数年間無医村地帯に飛ばされ、正規の医者はぬくぬくと本島の町の中で開業し、楽な暮しに浸っている。

「今、彼らは医介輔組合を結成し約五十人の医介輔の人達と医師認可を求めて闘争している。現在、正規の医師と医介輔との費金十の差を比べると医師公務員の場合約千ドル、医介輔は三百ドルが現実であった。S氏の働く職場は、沖縄刑務所の中である。正規の医者は刑務所診療所での診療を拒否し、いつも医介輔のみが、刑務所の診療活動がまわってくる現状である。今、彼らの要求は、一つに集約できるであろう。つまり「医者の免許を与えてくれ」ということである。医師の免許があれば、無医村においても、自分の持つ全力量を発揮して患者を見ることができるという。しかし、現在、本土の無医村問題を考えてみると、果たして医介輔の人達が積極的に、無医村地区の診療に従事できるであろうかということである。これは現在、医師という社会的地位が、常利的志向を孕むための必然的要因として、開業医の経済的基盤が、投薬の点数表示による診療計算を基礎としているため、患者経営がなりたち、診療所または病院を開業する際に、患者により多くの薬を与え、より点数の高い手術等の治療を施す事が必要となってくる

患者に対する奉仕精神というものは、現実の医療活動では虚構にしかすぎない。ほんの一部の医者ぐらいだろう患者と共に治療活動をしている人は。

S氏は、今年沖縄を訪問した武見会長の会見の中での、「沖縄本土復帰の後には、必ず医介輔に対する十分な配慮を施し、医師免許の授与を約束しよう」という武見会長の言葉に大きな期待をかけておられた。私達は本土における医療問題の中に、医社会的地位師の強さを、保険医総額問題を通してみてきた。彼らはすでに人民に対する支配者として君臨しており、そうした医師の集団に入ることのみを五十余名の医介輔の人達は復帰の前に待ち望んでいるのである。私達は、沖縄の医療の立ち遅れの実態をS氏との対話を通してまざまざと見せつけられた。

八月十八日

沖縄薬草分類を五十余年やってこられた薬学の第一人者、T氏と電話で対談。

T氏との直接の会見ができなかったのは、彼が薬草研究家（本土から来た）に対して不信をもっていたからである。それは、かつて前で完全自主交渉を要求し、機動隊・ガードマン一体の排除にも屈せず座り込みを続けてから、4ヵ月を数えるに至っている。自主交渉が始まり解決するように錯覚するであろうが、なおチッソは居座りを続け完全自主交渉といえる意味を示さない加害者チッソを相手に水俣で、そしてチッソ東京本社で取り組まなければならない。公害法案は財界や政界の圧力の前に加害者である企業を保護しているというように、問題を転倒し、あいた口がふさがらないという状態である。

公害の典型的な例である熊本水俣病は、患者と死者が多数ありまた、有機水銀が、自然界に蓄積され、新認定患者が、今もって誠意を示さない加害者チッソを相手に水俣で、そしてチッソ東京本社前で完全自主交渉を要求し、機動隊・ガードマン一体の排除にも、一月七日の五井工場前の暴行等にも屈せず座り込みを続けてから、4ヵ月を数えるに至っている。自主交渉が始まり解決するように錯覚するであろうが、なおチッソは居座りを続け完全自主交渉といえる意味